

うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 29



史跡
桜井駅跡
島本町

太平記の名場面
「桜井の駅の別れ」の舞台

「駅(驛)」とは宿駅のことで、摂津国嶋上郡桜井村におかれた大原駅と言われています(続日本記)。

この桜井の駅で、1336年(延元元年)足利尊氏率いる大軍を迎え撃つため京を発った補正成が、息子正行(まさつら)に遺訓を残し河内へ引きかえらせたと「太平記」に記されています。「桜井の駅の別れ」「桜井の訣別」とも言い、古典文学「太平記」の名場面の一つです。「青葉茂れる桜井の…」と唱歌にも歌われました。

「父子訣別之所」の碑があります。駅跡の敷地は1921年(大正10年)に史跡に指定され、現在は史跡公園として親しまれています。

桜井駅跡から北に徒歩5分の所に「島本町ふれあいセンター」があります。この敷地にたくさん種類の八重桜があり、見ごろは4月中旬とのことです。華やかな八重桜鑑賞もなかなかおつなものですよ(無料駐車場があります)。



補正成親子の像



4月中旬には満開になります

「桜井駅跡」へはJR京都線島本駅から徒歩約1分、阪急京都線水瀬駅から徒歩約6分

Culture Navi かるちがーたーび

「業務命令で処分もありえる」—やっぱり、おかしい

「処分」の一言に悩み続け

子どもの頃から保育士になるのが夢でした。37年前に大阪市に就職し、定年まで働き続けたと思っていました。そして、疑問に思ったことは何でも組合(市労組)に相談しました。このアンケートの時もすぐに相談しました。「業務命令で処分もありえる」。この一言が頭から離れませんでした。退職金がでなかったらどうしよう?。「何で好きな仕事を辞めさせられなあかんねん?」。組合の学習会に参加して、やっぱりおかしいと確信しました。

仲間と一緒にだから心強い

「何かあったら組合が守ってくれる」という一言でアンケートを出さない決心もつきました。マスコミでも話題になり、「おかしい」という世論がわき起こり、自分は間違っていなかったと思ったものの、不安はぬぐえませんでした。結局アンケートは破棄され、処分もされませんでした。市長からは何の謝罪もなく、逆に職員をしめつけることをしてきます。そんな時、組合で裁判の話があり、闘う決意をしました。やはり、仲間と一緒に心が強かったです。



「スタンダップ」はシンガーソングライターのかわさきゆたかさんが作曲した「思想調査アンケート裁判」の応援歌です。

「思想調査アンケート」裁判
原告59人の決意
スタンダップ
No.18 吉岡 真弓さん

16ミニシアターが えいが

認知症になった父の記憶をたどる 東京から福井へのロードムービー

認知症に入った父親と、家族を顧みず仕事に没頭してきた息子。冷めた夫婦関係に好き勝手なことをする子どもたち。絆がバラバラになった家族の再生を、東京から福井県・敦賀への家族の旅を通して描きます。同居する父親が、ある雨の日に町を徘徊し、認知症を発症。家では粗相をして家族を驚かせます。ときどき口にするのが「小さい頃に、地藏さんのある敦賀の寺の隣で暮らした。満開の桜がきれいだった」という記憶です。

同居している会社員の息子(俊介)一家は、夫婦間も親子間もバラバラ状態で、認知症の家族の出現にうろたえます。そんななかでも俊介

は家族の心と絆を取り戻したいと、車での旅行を思い立ちます。いったんは富士・箱根に向かいますが、一転して父親の原風景探しに福井県へ。主演の緒形直人は「ウチのオヤジ(緒形拳)が仕事一筋でこの役そのものでしたので、子どもの頃は私も寂しい思いをしました」と語っています。

ちょうどサクラの季節。人生の中でも、新しい旅立ちの季節でもあります。映画は人生の節目を後押ししてくれます。原作は、さだまさしの同名短編小説。緒形直人、南果歩、藤竜也らが出演。「利休にたずねよ」などの田中光敏監督で上映時間は107分。



(映画の画面の一部分)

「サクラサク」

捨象されてしまう部分こそが文化なのよ、本当は差異こそが文化よね
米原万里・田丸公美子(同時通訳者)

同時通訳者として著名な両者の対談での言葉。日本でも近頃は英語のできる講演者を招請する傾向があり、そうなるとその人の母語独自の表現を捨てることになる。それはつまらないし、その捨てた部分こそが文化なのだと言いました。もちろん日本語にも当てはまります、不必要な外来語を使いがちな今の風潮にも警鐘を鳴らしている気がします。

心に響くこのひとこと

初心忘るべからず
世阿弥

新鮮な気持ちを思い出して…。「初めてのときの気持ちを忘れてはならない」一能楽の大成者、世阿弥が50歳半ばに著した「花鏡(かきょう)」という修練書にある言葉です。さらに「種なければ手折れる枝の花のごとし」と述べています。種とは物事を成功させようとの思い、その熱意こそが真に人に訴えかけるものです。未熟なときでも、その熱意から発する魅力があります。未熟なころの熱意と習熟してからの熱意を両方あわせ持てば、どのようでも人を引きつけることができ、素晴らしい花を咲かせることができるのです。